

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The implicit expression and explicit expression of
ra and ra-a in the dialect of Kochi prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上野, 智子, UENO, Satoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002057

高知県方言ラ（一）の暗示性と明示性

上野 智子

(高知大学)

キーワード

接尾辞「ら」、ラ（一）、副助詞、暗示性、明示性

要旨

高知県方言では、接尾辞「ら」に由来するラ（一）が、高年層から若年層まで幅広くさかんに用いられている。しかも、接尾辞の機能の他に、文法上では接尾辞でありながら意味的には副助詞相当の機能を帯びる用例が多数認められる。接尾辞の本来の機能のもつ暗示性と、副助詞的機能に込められる明示性が、接尾辞機能の拡大と分化によって高知県方言に共存していると解釈した。ラ（一）は和歌山・三重・石川県にも分布するが、少なくとも高知県方言では、接尾辞ラがラーという長呼形を派生し、取り立て・強調を担う副助詞的機能を拡大させたと考えるのが妥当であろう。

1. ラ（一）の分布

ラ（一）の全国的な分布は、『方言文法全国地図』第1集（以下、GAJ）の「54 傘なんか（いらない）」に現れていて、「方言文法全国地図解説1」の〔語形の分類と記号の与え方〕によれば次のような配符がなされている。

なお、ヤ～の語形には大記号を与えたが、それはこの類に限らず、〈janaNdo〉、〈janaN〉、〈jara〉など他の類の語形にも同様の処置をとってあるし、〈ja〉自体も大記号としてある。（中略）

次の〈ja〉単独の形、ヤコソの類、ヤラの類は緑色とした。（中略）ヤラの類は〈jara〉の他〈ra〉〈raa〉を一緒にし、矢印記号を与えた。〈jara〉はヤ～の形であるため大記号であるが、他は小記号である。

〈jara〉は福岡県に〈ra〉は三重県南部と和歌山県、高知県と隣り合う愛媛県境に、また〈raa〉は高知県に分布しており、〈ra〉と〈raa〉は、紀伊半島南部から海を隔てて四国南部へ連続し、西日本の周辺部にまとまりよく分布する方言事象と受け止められる。このように、緑色の矢印記号は、高知のラ（一）から徳島・香川のヤ、岡山のヤコー、徳島・兵庫のヤカ、徳島・香川のヤカイなどへ続き淡路島のヤ・ヤコト・ヤコを経て紀伊半島のラへ繋がっていくものと理解される。

ラ（一）の見えるもう一枚の分布図は、「58 筆やら紙やら（たくさんもらった）」である。高知県にのみ〈-raa -raa〉が3地点分布しており、〈-jara -jara〉系事象の一つと捉えられていることがわかる。つまり、GAJでは、「傘なんか（いらない）」「筆やら紙やら（たくさんもらった）」に現れたラ（一）が、「やらん」（〈「にやあらん」「やあらん」）から変化した不定・二つ以上の事柄を並列して示す、副助詞「やら」の音変化形として処理されている。

ところが、GAJの「傘なんか（いらない）」と同じ質問で得られた、高知県西部の『四万十川流

『域言語地図』(上野1996)の分布図では、調査地点 109 地点中、54 がワ(ワー2を含む)で占められ、無回答14 ナンカ6 ラー6 ラ4 ラワ1 ナンゾ1……という分布量であった。GAJの広域調査の結果と、四万十川流域の狭域調査の結果との異同をどのように解釈したらよいかの検討も含めて、ラ(一)の用法を詳しく検討する必要があるだろう。

一般に、限られた質問による文法調査には困難が付き物であり、実際の用例を数多く集めて観察し分析することが欠かせない。全国的な分布の鳥瞰はその糸口を提供するが、これで一つの文法事項を把握し説明することはそもそも不可能である。高知県方言のラ(一)については、かねてからの関心事項であったため、高知市を中心として自然会話での具体例の記録に努めてきた。以下には当該方言におけるラ(一)の具体例を記述し、分類・整理をもとに考察を進めてみたい。

2. ラ(一)の用法(1)——上接語の検討——

はじめに、ラ(一)の文法環境を検討する。得られた文例の上接語に注目して分類を行った結果が表1である。体言を基本とするが、そうでない場合が認められる。

表1 ラ(一)の上接語

体言	代名詞	① 指示代名詞 ② 人称代名詞
	普通名詞	③ 時 ④ 所 ⑤ 人 ⑥ その他 ⑦ 外来語
	固有名詞	⑧ 地名 ⑨ 人名
準体言		⑩ 準体助詞
用言		⑪ 動詞 ⑫ 形容詞

大きくは三分類が可能である。体言が大多数を占める一方で、体言に準ずる形式として準体助詞、さらには動詞・形容詞など用言が見分けられる。文法機能と意味内容の特性によって、体言を①～⑨に細分類し、全部で12の分類項目に落ち着いた。それぞれについて、代名詞・普通名詞・固有名詞・準体言・用言の順に実例をあげながらラ(一)の特徴を見よう。

なお、文例にはアクセントを付し共通語訳を施すが、ラ(一)の部分は*とした。その理由は、筆者自身、高知県方言に触れた当初から分析にとりかかるまで、ラおよびラーが単純に共通語の副助詞「など」「なんか」に相当するものと考えていたにもかかわらず、以下の文例の共通語訳を数人の話者に提示した際、ラ(一)は強調する意味合いが強く、「など」「なんか」とは異なるという教示を得たことによる。同様の指摘は、高橋顕志氏の幼年時代の氏自身を指すケンラのラはまさに明示性を担っている、との、学会発表後の教示にもうかがわれ、双方はよく響き合う。

2.1. 代名詞

①指示代名詞

○アレラ エイゴガ デキント ……。あれ* (ホテルの専門学校生) は英語ができないと(い

けないらしいね)。中女→同

○ホシナ ココラーワ? だったら、ここ* (の布地) は? 中女→同

②人称代名詞

○ワシラー ホーラレル。(冗談に) わし*は捨てられる。老男→中女

○シロートヤケ ワシラー。(将棋は) 素人だから。わし*は。老男→同

○アタシラ コレカラ トシガ イクシ ネー。私*はこれから年をとるからねえ。中女→同

○アタシラ ヨー セン。私*はとてもできない。老女→同

○オマラ パカ ウタウナ。おまえ*ばかり歌うな。老男→同

○アンタラノ クエ? あんた*の所へ? 中女→同

指示・人称代名詞に下接する場合、ともに共通語の用法と同じである。きわだった方言の特徴は認められない。代名詞ではないが、

○ジブンラモ ワスレタ ヨ。私*も忘れたよ。青女→同

○オタクラ ハヨ スンダ? あなた*はもう済んだ? 老女→同

○オクサンラ ヤッタ コトガ アルキ ダイタイ イメージガ ワカルロー。奥さん*は(ダンスを)したことがあるから、だいたいイメージがわかるだろう。老男→老女

のように、自称・対称の人代名詞相当の名詞に接続している。自称の場合は共通語と変わりがないが、接辞オ・サンを伴う敬態のオタクラ・オクサンラは共通語には見出しにくいのではないか。

2.2. 普通名詞

ラ(一)の中心的用法と目され、得られた実例が多いので、意味分類を行った。

③時

○ムカシラワ イマラワ ツカイタイ ホーダイ。昔*は(水など無駄に使えなかったけれど)、今*は使いたい放題。中女→同

○キノーラモ ヨンジュー ヒチニンノ ダンタイガ ハイッテ。昨日*も47人の団体(客)が入って。青女→中女

○キョーラ オヨギヨッタラ サムイ モンネー。今日*は泳いでいたら寒いものねえ。中女→同

○ユーベラー アウト。昨晚*は全く駄目だ。老男→中男

昔と今、のような抽象的な時間表現から、昨日と今日、さらに具体的な時間表現もある。

○オーカタ ニチヨーラモ ヨージ ナカッタラ ギヤセンヤロ。たぶん日曜*も用事がなかったら来はしないだろう。青女→同

○ニジラーカラ アレガ アッテ コナイダラーモ.....。2時*からあれがあつて、..... このあいだ*も。老女→同

また、単語レベルから、次のように、説明を加えた名詞句にも接続している。

○ヨーザンノ トキラデモ。養蚕の時*でも。老男 < 四万十川流域の十

和村>

○テンキガ フク マエラーガ ワルイロー。(体の具合は) 天気が荒れる前*が悪いだろう。

老男→同

④所

○オフロノ ヒガシラ ヨネ? お風呂の東*だよな? 老女→中女

○キタラー イッタチ ヤマバーデ ナンチャー ナイ チャ。北*へ行っても山ばかりで何もないうてば。<青女教示>

方位に接続した例で、「～側」「～のあたり」の意味合いをもつ場合が多い。この他、

○ミサキノ ホーラ イッタラ ネー。(足摺) 岬の方*へ行ったらねえ。青女→同

○バスノ ナカラデワ タバン。バスの中*では食べない。中女→同

○テレビノ アル トコロラー ツカワン ヨー。テレビのある所*は使わないよ。中女→同

○ウチノ ハハノ サトラードワ。うちの母の里*では。青女→老男のように、方・中・所・里への接続例が得られた。

⑤人

○オトートノ ヨメラモ トーキョーニ オルシ。弟の嫁*も東京にいるし。中女→同

○ウチノ マゴラモ カエッタラ ハヤ キガエテ。うちの孫*も(成人式から)帰ったら早々と着替えて。老女→同

○オバラーガ イヨッタデス ヨ。おば*が言ってたんですよ。青女→老男

嫁・孫・おばなど、身近な人物に接続する場合もあれば、

○トーキョノ ヒトラモ オルロー? 東京の人*もいるだろう? 青女→同

○アタラシー コーラーガ ハイッテ。新しい子(=部員)*が入って。青男→青女

○シンゾーダカノ センセーラーニ。心臓外科の先生*に(診てもら)。老男→中女
意味領域の広い「人」「子」、尊敬される対象である「先生」にも接続している。さらに、

○ゲド マワリノ トモダチラーガ イキヤーセン カイ? けれど、周りの友達*が(学習塾へ)行きはしないの? 中女→同

○カゾクラ ヤルバー キー ツカウ イーヨッタ。(故人の) 家族*は(人が心遣いをすれば)するほど、気を遣うと言っていた。中女→同

の友達・家族のような、集合名詞に接続する場合は、ラ(一)の本来的な複数表示機能は弱化、ないしは退化していると思われる。

⑥その他

○コンナ ガララモ アリマスシ。こんな柄*もありますし。老女(店主)→上野

○ゴハンラ ゼンゼン タバン。(最近の猫は贅沢で) ご飯*を全然食べない。老女→同

○ホントニ ナオリヨイ。カンゾーラーワ。(うこんを飲むと) 本当に治りやすい。肝臓*は。老女→老男

○ニューインラー デキン。入院*はできない。老女→同

○タイジューラ ヘツテナイ。ヒトツツモ。体重*は減ってない。ひとつも。中女→同
○ヒザラニワ ラクヤケド。(アクアピクスは)膝*には楽だけれど。中女→同
○アシノ ウラノ ガザガザラガ キレイニ ナル。(塩サウナは)足の裏のがさがさ(した部分)*がきれいになる。中女→同

◎エリモトラノ カンジモ イーシ。襟元*の感じもいいし。中女(店員)→上野
○ネンキューラモ ゼンゼン トツテナイ? 年休*も全然とってないの? 中女→同
○シャミセンラウワ カマンガヤ ネー。三味線*はかまわないだねえ。中女→同
○タツカイ クスリラ イレテモ ヨー。高い薬*を入れてもねえ。中女→同
○ココロ アイサツラ スルモン オランヤイ カ。ここは挨拶*をする者がいないじゃないの。中女→同

○シンヨーキンコラワ ネー。ゴネンホショー。信用金庫*はねえ。五年保証。中女→同
○オマケニ センスイシノ シカクラ トラナ イカン。おまけに潜水士の資格*を取らなければならぬ。中女→同

◇メンドクサイ。シカモ ハイタツラ ユータラ ヨ。面倒くさい。しかも配達*と言ったらね。青女→同

◇フートーラー ユーノワ。封筒*というのは。中女→中男
○ツクエラーワ ウエニ アゲル カエ? 机*は上にあげるかい? 中男→同
○ハコラー ケサナ イカンロー。箱*は消さなければいけないだろう。青男→中女
○ソナン カンガエタラ ジュギョーラ ヤスメン。そんなふうに考えたら授業*は休めない。青女→青男

○ガクセキバンゴラ キレイニ ナランジュー。学籍番号*がきれいに並んでいる。青女→同

◎クサカリラ アル? (あなたの高校に)草刈(作業)*はある? 女子高生→他県女子高生
さまざまな名詞に付き、しかも多様な待遇関係において、中学生以下の用例はまだ得ていないものの、高校生以上の年層の男女にさかんに用いられている様子が見られる。抽象名詞や自然現象を表す名詞(雨・天気など)にも接続する。そして、対話者が外来者である場合や店員が客に対する場合(いずれも◎の文例)にも出現するところから、話者にはラ(一)を方言としてとらえる意識が弱いと判断される。また、接頭辞「お」や丁寧表現とともに、

○デパートデ オサカナラ カエレン ネー。デパートでお魚*は買えないねえ。中女→青女

○オーバーサンカラ キータ オハナシラガ アルヤナイ。おばあさんから聞いたお話*があるじゃない。青女→老男

○タイシボーラ ナイデショー? 体脂肪*はないでしょう? 中女→同
○オナカラ アレオ ツケナ イカンデショー。キンニクオ。お腹*のあれを付けなければいけないでしょう。筋肉を。中女→同

のように用いられている点で、ラ(一)の待遇品位は決して低くないものと思量される。

⑦外来語

外来語の特立は、和語としてのラ(一)の接続範囲を知るために重要と判断される。すでに和語ばかりでなく漢語にも接続した例を見たが、外来語にも多く認められ、語種の別を問わない。

○コートラヨリ ヌクイ。コート*より温かい。老男→中男

○スーツラ コータラ シチハチマンパー スグニ スルニ ヨー。スーツ*を買ったら七、八万円ぐらいすぐに出費するからねえ。青女→同

○サンダルラワ ヌギステテ ヨー。サンダル*は脱ぎ捨ててねえ。青女→同

○タダ ボーリングラワ セラレンケド ネー。(足のけがは治っても)ただボーリング*はしてはいけないけれどねえ。中女→同

○テコギノ ボートラ デチューヤロ カー。手漕ぎのボート*が出ているだろうか? 青男→同

◇ヘルニヤラ ユタラ ウゴケンヨーニ ナル モン。ヘルニヤ*といたら動けないようになるもの。中女→同

○イベントラガ アッタラ ネー。イベント*があつたらねえ。中女→青女

○ワインラ ノミユ ガー?。(昼はここへ来てビールを飲み、夜は)ワイン*を飲んでいるの? 中女→同

○ガスラ タイヘンナ コトニ ナルキ。ガス*はたいへんなことになるから。中女→同

○シーツラ アット ユーマニ カワク デー。シーツ*はあつという間に乾くよ。中女→同

○リックラモ ヨケ アルシ。(登山用の)リュック*もたくさんあるし。中女→老男

○ヨー スーパーラデモ アウケド ヨー。よくスーパー*でも会うけれどねえ。青女→同

以上のように、衣食住など生活分野全般に偏りなく用いられ、和語・漢語に勝るとも劣らない。

2.3. 固有名詞

普通名詞の④所⑤人に対応して、固有名詞の⑧地名 ⑨人名にも接続する。

⑧地名

○トーキョーラ イタラ フリモノ フルノニ ダイブ アルク ネー。東京*へ行ったら乗物に乗るのにだいぶん歩くねえ。老女→中女

○キョートラ イキタイケド。京都*へは(旅行に)行きたいけれど。青女→同

○オキナワラ イッテ。沖縄*へ行って。中女→同

○ゴトーレツトラモ エイ ネー。五島列島*もいいねえ。老女→上野

○ホダカラモ ソナンヤケド ネー。穂高*もそうなんだけれどねえ。中男→同

◇ウマヅラ ユータラ スゴイデス ヨ。馬路*といたら、すごいですよ。中男→中女

○ヤナギマチラニ アル。柳町*にある。中男→同

○ロクローラト イッショデ。六郎(畑地名)*と同じで。中男→中男女

大から小までのさまざまなレベルの地名に接続しており、接続の範囲に制限はない。

⑨人名

○キムラ タクヤラー ……。木村拓哉*が ……。中男→同

◇ギンラー ユー ゲジョ ……。(江戸時代の古文書に) ぎん*という下女が(出ていたかなあ)。中男→中男女

○コバヤシコーチラーヤッタラ アカン ユーローニ ネー。小林コーチ*だったら「いけない」と言うだろうにねえ。中女→同

人物の知名度の高さには無関係で、地名同様、範囲は限定されないようである。

2.4. 準体言

⑩準体助詞

○オールドファッショントカ アンナガラー?。オールドファッション(ドーナツ)とか、あんなの*は? 青女→幼男

○ソナナガラーデ ……。そんなの*で ……。中女→同

ガは当該方言の準体助詞である。その活発な様相についてはすでに考察を試みた(上野1993)。ラーはこのガにも接続している。現時点ではアンナガラー・ソナナガラーの実例しか得ていないが、話者の教示によると、ガラーは連体詞に限らず、他品詞との接続が可能であるという。

2.5. 用言

⑪動詞

○ウケツケ スルラーテ キータ コト ナイ。「受け付けする」*って、聞いたことはない。中女→同

⑫形容詞

◇ドーデモ エイラー ユーテ ……。「どうでもいい」*と言って ……。中女→同
用言に接続する例は、後に「聞く」「言う」を従えている。それぞれ「受け付けする」「どうでもいい」という文全体をラーが承けていると見られ、次のように、終止形でない場合もある。

◇リビング ノケテラー ……。「リビングを退けて」*と(言って)。青女→同
ラ(一)に「言う」が続く例(いずれも◇の文例)は、すでに「ハイタツラ ユータラ」「フートルラー ユーノワ」「ヘルニヤラー ユタラ」「ウマジラー ユータラ」「ギンラー ユー」のように体言への接続例があり、用言にのみ認められるわけではない。同じく、体言で、ラ(一)の承ける範囲が広く一単語を超える例が、次のように見集められる。

○ハヤ ニハイメ サンバイメラ イキユー。もう二杯目三杯目*を飲んでいる。青女→同

◎ドニチラーワ ヨクジツニ ナリマスケド。(予定日が)土日*(の場合)は、翌日になりますけれど。中男(郵便局員)→上野

○デンシャヤ バスラワ ツカワン。(車だから)電車やバス*は使わない。中女→同

◎ヤキオムスビラモ アリマスシ。(にぎりや散らし寿司や)焼きおむすび*もありますし。老女(店員)→上野

○ホンカラ ショーセツカラ エイガラーカラ。本から小説から映画*から（臨死体験についての情報が流されている）。老男→中女

直前の語の種類によって、順に、⑥③⑦⑥⑥に分類できる。体言をABCに置き換えるとそれぞれ、ABラ/ABラーワ/AヤBラワ/AヤBヤCラモ/AカラBカラCラーカラ、となり、助詞との承接関係を見ると、ラ（一）は助詞ワ・モ・カラの前に位置し体言に接続する形式で貫かれていることがわかる。AヤBラワと同じ意味をもつ、AラBラワは、

○アカピーマンラ キーロピーマンラワ アマイヤイ カ? 赤ピーマン*や黄色ピーマン*は（ふつうのピーマンに比べて）甘いじゃないの? 中女→同

のように、1.で見た「筆やら紙やら（たくさんもらった）」の並列用法と類似し、例示しながら全体を統括する機能をもつ。しかも、「など」「なんか」には用いにくい反復形式である。

3. ラ（一）の用法（2）——下接語の検討——

次に、下接語について整理すると、表2のようになる。

方言形として顕在する場合と、格機能が認められるものの、形としては現れず潜在する（省略さ

表2 ラ（一）の下接語

係助詞	は ・ <u>も</u>
格助詞	(主格) が (連体格) <u>の</u> (連用格) <u>に</u> ・ <u>を</u> ・ <u>へ</u> ・ <u>と</u> ・ <u>より</u> ・ <u>から</u> ・ <u>で</u>
副助詞	<u>ばかり</u>

※ は顕在のみは潜在のみ

れる)場合とがある。「は」を例にとると、「ムカシラワ」(顕在)「ユーベラー」(潜在)、「と」を例にとると、「ロクローラート」(顕在)「ギンラー」(潜在)のようになる。これまでに得られた用例では、表2の助詞は、顕在・潜在/顕在のみ/潜在のみ、の三種に分かれる。種類では顕在するものが多くなるが、2.の文例からわかるように、全体的には3例に1例以上が潜在の例であり、「は」の場合、33例中20例を数える。頻度から見ても「は」の用例は多く、「も」とともに係助詞はラ（一）との親和性が高い。また、副助詞「ばかり」には「ケンシュウラバツカリ（研修ばかり）」のような強調の加わった例や、表には省いたが、「イマノ カイシャラーミタイニ（今の会社みたいに）」の「みたい」に続く例がある。

さらに、ラ（短呼形）とラー（長呼形）の分布を調べてみると、表3のような結果が得られる。「は」の場合、ラーを「ラは」に解釈できる可能性はあるが、この分布から判断すれば、「は」潜在で短長同数（10）、その半数（5）の割合が「は」顕在の長呼例にも認められることにより、ラがラーに変わる必然性を「は」の下接には求めにくい。また、全般的に、短長の比率は顕在例で26:23、潜在例で20:21のように大差なく、しかも、顕在例しか得られていない「も」「の」「に」「より」「から」「で」を合計した短長の比率は16:11で、助詞の有無をラとラーとの関係に有機的に結び付け

表3 ラとラーの分布

		は	も	が	の	に	を	へ	と	より	から	で
顕 在	ラ	8	9	2	2	1						4
	ラー	5	4	5	1	1			2	1	2	2
潜 在	ラ	10		2			5	2	1			
	ラー	10		1			2	5	5			

ることはできない。いずれのラーもラの長音化形と考えられよう。

4. ラ（一）の機能

当該方言のラ（一）が接尾辞「ら」とどのような点で異なるかを比較してみよう。表1で整理したように、ラ（一）の場合、体言以外にも接続可能である。「キータ」があとに続く例は直前の話部が伝聞内容であることを裏づける。形態は動詞でも一文ととらえるのが自然であろう。また、「言って」に連続していく例は、ラ（一）の前までが話者以外の発話内容であり、しかも、ラ（一）の直後に引用の格助詞が顕在する場合、ラ（一）の上接部が文相当であることは自明であるが、これを用言の連体形と捉えれば、ガ同様、準体言として扱うことができる。

一方、体言に接続するのがラ（一）の中核的用法であることは、その種類が2.の①～⑨のように多様であることから明らかである。「ら」の上接語と比較対照すると表4のようになる。

ラ（一）の場合、形容詞語幹に接続する用法はなく、準体助詞や文（用言）に接続する用法が加

表4 「ら」とラ（一）の上接語の比較

ら（古典語・現代語）	ラ（一）
形容詞語幹・状態性を表す体言	
指示代名詞またはその語根	指示代名詞
一般的な体言	普通名詞・固有名詞（地名）
人を表す体言・固有名詞	人称代名詞・固有名詞（人名）
	準体助詞・文（用言）

わっている。接尾辞「ら」は「一般的な体言に付いて、ややぼかした表現とする。同類のものを含めたり、周辺のものにまで及ぼしたりする。」（角川古語大辞典）「名詞に付いて、それと限定されない意を表わす。①事物をおおよそに示す。」（日本国語大辞典）と説明されているが、ラ（一）にはいったいどのような機能が認められるのかを明らかにしてみたい。

友定賢治(1992)は岡山県新見市方言のヤコーについて、山口堯二(1988)の「など」を対比しながら、一部を除いて共通の機能が認められることを明らかにしている。本来、別語であってもかなり酷似した意味機能を発揮しているヤコーと「など」の関係¹が、ラ（一）との間にも認められるのかどうかを検討してみると、例示・取り立て・統括の三分類は可能であるが、例示・取り立ての下に定位された軽視・謙遜と反撥は当該方言のラ（一）には希薄で、

(山口論文は)「など」以外の「なんか、なぞ、なんぞ、なんて」も含めての考察なのでやや性格が異なる。ただ、「ヤコー」の共通語訳はこれらがあてはまるという指摘とは一致しない。もっとも、指示代名詞と人称代名詞への接続は高知県方言に限らず、日本語全般に認められる用法で軽視・謙遜の意味合いを含み得るが、当該方言の場合、辞書の記述にあるような人を表す体言や人名への接続に限らず、人以外の一般的な体言への接続に関しても同様である。「傘なんか (いらぬ)」には、次のような質問の意図と結果の解釈が見られる。

例示を表す共通語の「なんか」に対応する方言形を求めようとした項目である。特に、取り上げた対象を否定的にみなす場合の用法について、ここでは見ようとした。例示を表すという点では44「お茶でも (飲もう)」と意味的に共通する面もあるが、両項目で回答された語形に重なる部分はほとんどない。むしろ、取り立ての形式を調べた 11「ビールは (飲まない)」、12「酒は (飲む)」などの項目に共通する語形が認められる。(GAJ解説)

こうした否定的にみなす意味合いがラ(一)には微弱で、しかも、「お茶でも (飲もう)」「ビールは (飲まない)」「酒は (飲む)」の分布図にも現れない。「センサーラ」を例にとれば、ラ(一)に否定的な意味合いを見出すことはできない。『角川古語大辞典』は、

自己を表す呼称の語に付き、自分のことを表す。自分一人の場合も、自分たちという複数の場合もあって、複数であることを明確に意識するわけではない。後世になると謙遜の気持が込められることが強くなるが、本来、自分を表す呼称を表現すること自体、謙遜的表現であることが多いからであって、「ら」に特にそのような表現性があるわけではない。

のように注意を喚起している。なお、現代語の「など」については近年活発な議論が展開されており(植田瑞子1991, 加波尚子1995, 森貞1999)、「否定的強調」「否定性」「軽視・謙遜」について細密な検討が重ねられ、多くの知見が得られる。

5. 他方言のラ(一)

GAJの「傘なんか (いらぬ)」の分布図には和歌山県・三重県にもラが分布している。紀伊半島南端の東牟婁郡勝浦町の臨地調査で得られた文例を挙げる。

○セト ヌマトノ アイダラー ナマエガ アッターラ ー。セウナイ。岩場と砂地の間*に名前があつたらねえ。苦勞がない。老男→上野

○ギョショーラヤッターラ フッテナイ。漁礁*だったら(地図には)載ってない。中女→同

○テキラヤッターラ シッタール。あの人*だったら知っている。中女→青女

また、『全国方言資料』によれば、和歌山・三重・石川各県にも高知県に近いラの存在が確認される。勝浦町に隣接した和歌山県東牟婁郡古座町(1958年2月23日収録)²、紀伊半島を北上した尾鷲湾に続く三重県北牟婁郡海山町(1958年8月11日収録)³、さらに北陸の石川県石川郡白峰村(1956年8月18日収録)⁴に散見する。

三重県の一例を除いて、他はすべて「自由会話」の中に出現している。いったいに長呼形は振るわないが、この談話資料では、とくに石川県白峰村のラの用法が高知県方言のラ(一)とよく似通っている。アシタラ・イマラ・ムカシラワのように時に関わる表現、マメラモ・アズキラデモ・

ヌカラ・クーモンラワ・イエラノミソラトワのように、普通名詞に接続する例が豊富である。

さらに、三重県尾鷲市⁵では、現在、次のようなラーが聞かれるという。

- アシエーノ コーラー マーカイ アソンビョルバッカデカイ ハンリヤイナイ ワナ。うちの家の子供は遊んでいるばかりで張り合いがない。(62歳男, 以下同)
- マー ソンナ ホンラー ナオシトケ ヨー。もう本とかは片付けときなさいよ。
- コーチラー アソビニ イキタイトモ オモワンヨッテ ナー。高知なんか遊びに行きたいとも思わないよ。(23歳男, 以下同)
- アンニャン ドイライ クルマニ ノットル デー。デモ マー カネラー ナイキッテケンサ。お兄ちゃんがとても大きい車に乗っているよ。でももう本当にお金がないんだ。
- ダイガクラーニ キタイシタラ アカンテ ジブンデ ヤリタイ コトワ ジブンデ セナアコカ。大学なんかに期待したら駄目だ、自分でやりたいことは自分でしなきゃ駄目だ。
- シャカイジンラーニ ナッタラ シータイ コト ナンモ デキーヘンヨーニ ナル デ。社会人なんかになっちゃったらやりたいことが何もできなくなるよ。

同じ尾鷲市を含む、三重県南部(紀伊長島町・海山町・尾鷲市)の方言集、中野朝生(1989)『面白紀州弁』には次のような例が拾える。

「ソナイナ、アガリバナニ、ジョーリラヌグナ(そのような入口にぞうりをぬいではいけない)「マツタケラー、ズンボオクマデイカナ、ナイデー」(まつたけなどは、山奥にいかないと、ないよ)「テキラー、ヤリコンデッタデー」(彼等は、いきおいこんでいったよ)「ワシラ、トシノカゲンデ、サムイノアオーイカラ」(私など、年令のせい、寒い日が多いから)「アミラー、ヒコカイー」(網など、引かないよ)「タツアンラデモ、ミトハカシテ、ヨーユーヨッタ」(達さんも見ているのかよく言っていた)「ネヤラー、ワガトセー」(寝具を出す事など、自分でしなさい)

ラ・ラーともに認められ、高知県方言のラ(一)との共通性が高いと判断される。GAJで<ra>の分布する三重県南部と和歌山県には、高知県と同じ<raa>が存在することになる。しかも注意されるのは、ラ(一)の共通語訳が、全くないもの、「など」「なんか」「たち」「あたり」が当てられるもの、のように、一様ではないことである。2.の文例のラ(一)に訳を与えなかったのは、このように半ば恣意的にならざるをえない共通語訳に難点を認めたからでもある。

ともあれ、高知県のラ(一)は和歌山・三重県を経て石川県白峰村まで辿ることが可能である。高知県から三重県までは海を介して連続するが、北陸石川県へは連続しない。ところが、京都府亀岡市出身の23歳男性によると、「酒はたまにしか飲まない」を「オサケラ メッタニ ノミヤシマヘン」と言うとの教示があり、やや隔たって石川県白峰村との連続も考えられる。海を介して隣接する和歌山県南部、それに続く三重県、いったん途切れて、石川県白峰村に高知県方言のラ(一)相当のラが見出されたことによって、接尾辞「ら」の古典的用法はおぼろげながらも京都を中心とした周囲の残存分布を描き出しているように観察される。

現在、日本語方言に確認されるラおよびラーの用例を可能な限り拾ってみたが、各地で綿密な臨地調査を行えば、もっと広範な分布を示すだろう。おそらく、GAJに現れない地域では劣勢に傾いているのにちがいない。高知県をとりまく他の四国・中国・九州地方では、今のところ、こ

の種のラ（一）の報告は得られないが、学会発表を行った直後に各地の研究者から寄せられた情報では、時・所・人に接続する用法は、中部地方あたりまで聞かれるのではないかと推察する。

6. 文献に見える「ら」

文献ではどのようなであろうか。『時代別国語大辞典 上代編』には①情意性の意味を添える（形容詞語幹「うまら」・情意性体言「さかしら」）②複数を表わす（名詞・代名詞）③語調を整え、また物事を婉曲に示す、に三分類され、③には『古事記』『万葉集』の用例を挙げている。

花橘下づ枝羅は人皆取り上つ枝は鳥居枯らし（応神紀13年）荒野等に里はあれども（万929）

吾が寝る夜等は（万3329）吾が目等は真澄の鏡 …… 吾が毛等は御筆はやし（万3885）

この他、『万葉集』では、今日・川・野・鳴海・絹綿・綿・米・心・つら・はら、のように、種々の名詞が上接している。阪倉篤義(1966)『語構成の研究』は、(万3885)の「等」について、「かならずしも二つの眼、数本の毛を意味するのではないことと言ふまでもない。」とし、

一つのものを代表的に呈示しながら、その背後や周辺に、これにまつはつて存在し、これによつて代表されるやうな事態を暗示的に表現しようとする、一種の臚化法的表現であると見て、③の意味機能が①②と識別されることを説いている。

築島裕(1969)『平安時代語新論』は、この「臚化法的表現」が「平安時代に下つても、依然として同様に認められる。6」としている。また、平安時代初期の『竹取物語』の「なんぢらよくもてこずなりぬ・いやしきたくみら・たくみらいみじくよるこびて」について、築島裕(1963)『仮名文学と漢文訓読』で、「なんぢ」「ら」も「訓読特有語」であることを指摘し、「ら」については、『玄奘表啓平安初期点』二六行の「前の舍利仏像梵本經論等（ヲ）して謹（ミ）て闕に詣てて奉進と（タテマ）ツリ（キ）」を論拠としている。

一方、和文では10世紀後半の『平仲物語』(1)『土左日記』(2)ともに一例ずつ認められる。

(1)この男の友達ども集まり来て、いひ慰めなどしければ、酒ら飲ませけるに、宵になりなければ、いささかけちかき遊びなどして

(2)「今日は都のみぞおもひやらる。小家の門の注連繩の鯨の頭・柀らいかに」ぞ

(1)の「酒ら」の類似表現として、『土左日記』には、

(3)鹿兒の崎といふところに、守の兄弟、またこと人、これかれ酒なにともて追ひ来て、磯に下りみて、別れがたきことをいふ。

(4)このあひだに、はやくの守の子、山口のちみね、酒よきものどももて来て、舟に入れたり。のように、「など」の原形と言われる「なにと」や、「ども」を伴う用例が見えるが、『土左日記』や『平仲物語』ではすでに「ら」よりも「など」「ども」の用例が多い。

このような奈良時代から平安時代の「ら」と中国文献の「等」との比較を行った、毛利正守(1972)「例示「ラ」の成立をめぐる」は、築島とは異なる見解を次の5点に集約している。

1. 奈良時代の臚化法的表現の「ラ」と漢籍（及び漢訳仏典）の「等」とは同一でない。
2. 漢籍（及び漢訳仏典）の「等」には複数の意味と例示の意味とがある。
3. 漢籍（及び漢訳仏典）の「等」に基づいて生じた訓点資料の「ラ」と奈良時代の「ラ」と

は同じでない。

4. 訓点資料における「ラ」と平安中期成立の「ナド」(和文に見られる)は同じ意味と考えてよい。

5. 奈良時代の「ラ」及び平安時代の和文の「ラ」(奈良時代のラの本質が受け継がれてゐる。用例は多くないが、古今集の「のら」、平仲物語「さけら」「おもとびとら」、源氏物語「ざふじら」「あきののら」「まかはら」などあり)は「ナド」と同じ意味ではない。(このラはナドよりも用法上・意味上狭義である)

とくに注目されるのは5で、その根拠が漢文訓読で生じた「ラ」と奈良時代の「ラ」とが異なる(1～3)点に置かれている。これに先立つ、小林芳規(1955)「訓点語法史における副助詞「ら」」は、「ら」の品詞認定について、平安中期以後の訓点資料に(イ)活用語の連体形(ロ)並列の助詞「と」(ハ)格助詞「と」に付く「ら」があり、(イ)(ロ)(ハ)の接続上の特色が付属語であることを示し、助詞の分類基準から検討を加えると、山田孝雄の「副助詞」、時枝誠記の「限定を表わす助詞」にあたりと判断している。「ら」の添える意味は、

副助詞「ナド」と稍似て、「ナド」が異種類のものの一つを取り出して他にもあることを例示する助詞であるのに対して、「ら」は同類の多くの中から或る一つ又は一群を例示する意で、口訳して「…ノゴトシ」・「…ノヨウダ」に当たると考えられる。萬葉集古義に、「その物と限らずなほ餘もある事をいふなり」とある解が参考になる。

のように「など」と似て異なる副助詞と見る。その理由は、体言に付く「等」に当てられていた接尾辞「ら」の訓が「ごとし」に当てられていた「等」の訓にまで及んで、副助詞の用法を示す直訳訓が生じたためとし⁷、さらに『平家物語』『正法眼蔵』の和漢混淆文では、「経典の引用から次第に一般のことばにまで入って来た」、『拾遺和歌集』『曾禰好忠集』の「物名」の歌では「全く異なった位相のことばが、偶々用いられた」、また、「又古今集の「物名」の中に漢字音語を詠み込んだ歌のあることより考えても、漢文直訳語「ら」の入る可能性は考えられる」と見る。実際、索引をたよりに漢文訓読文と和漢混淆文から用例を拾ってみると、次のようになる。

平安後期・院政期書写加点の漢文訓読文『興福寺藏大恩寺三藏法師伝』には、多くの人物名・人や場所以外に、梵本・雑物・法服・滅不滅などラ読み推定可能の「等」の用例とともに、「是(ノ)如(キ)等」「(ト)等」の用例も散見する。ラの訓点の施されている例の中には「威儀幢蓋音楽等」「滅不滅^ラ」のように名詞を列挙する用法が含まれる。

鎌倉初期の和漢混淆文、明恵自筆『明恵上人夢記』(1196～1230)には「等」を「ら」と推定読みできる多くの用例があり、上接語は、池・犬・魚・衣服・高欄・学問・形・事・小虫・死人・囚・土・宝樹・物・龍・造作・アフラ物・仙薬・イタチ・兔・雲霞・天竺・枝葉・糟など、人物・仏・所を含み、多彩である。明恵の教訓・談話を弟子長円が筆録した『却癡忘記』(1235～)にも灯明・地獄・年月日次のほか人物・代名詞、推定読みの「(ト)等」の用例が拾える。

毛利正守(1977)「「憶良ら」考—上代の接尾語「ら」を通して—」は、上掲の一連の指摘を承けて、さらに検討を加え、「例示の「等」ではないラの用例(複数)は、訓点資料にもはやくからあらはれるが、例示の「等」をラと訓むことは訓点資料でその成立がずつとおくれる」「この例示の

「等」が「ゴトシ」にかはつて、あるいはこれと平行して、「ラ」と訓まれて行くわけであるが、この例示の「等」がラと訓まれる時点が日本語としての例示のラの誕生である」と述べている。しかも、『土左日記』の(3)「またこと人、これかれ酒なににともて追ひ来て」とらえて、次のような見解を打ち出している。

この「さけなにと」は「酒や何か」といつた意味なので、「なに」といふ、あいまいさによって、これが臚化法表現であると云へると共に、一方で、酒と「何か他のもの」をも示そうとする方向が伺へ、従つて「など」にはもともと例示の意味も含まれてゐたことが知られるのである。「など」の意味はよく上代のらと比較され、しばしば同じやうに扱はれるが、このやうに「など」は実際、上代のらにみる如き臚化法的な意味と共に、その上代のらにはなかつた例示の意味をもそなへてをり、その意味で両者は異なるものである。宣長も「等は後に那杼と云が如くにて、(中略)正しく其物に限らず余もあることを云辞なり」とみてゐたが、このやうに「など」と上代のらと同じやうにみてしまふのはあやまりであり、かかるあやまりは現在もそのまま行はれてゐるやうである。上代のらを「など」と同じやうに扱つてしまふために、なんなく上代のらにも例示の意味がそなはつてゐたとみてしまふわけである。両者は右の点で異なることを弁へるべきであらう。

時代が下つて『日本大文典』(土井忠生訳)では「実名詞に接続して、それが複数に立つてゐる事を示すために使はれる特定の助辞」として、次のように記述される。

ORa(等)はDomo(共)よりも一層低いものである。この語の添はつた人や物を見下げて輕蔑する意をあらはすが、それは書きことばでは関係がないから、主として話しことばの上のことである。例へば、Fiacuxōra(百姓等), Tengura(天狗等), Ludeura(ジュデウら), Varera(われら), Midomora(身共等), Arera(あれら), Sochira(そちら), Carera(彼等), 等。

これは、現代日本語の話しことばの実態に合致する。しかし、「書きことばでは関係がない」はずの「ら」に変化が兆し、佐竹秀雄(1999)「複数を示す「ら」」によると、最近、新聞報道で原則としている人名・職名・人を表す語に付く「ら」が例外的に「たち」へ移行する場合がある⁸。

以上のように、平安時代から院政・鎌倉時代までに、和文では普通名詞に接続する用法が見られなくなり、もっぱら漢文訓読および和漢混淆文に用いられるとともに、平安中期以降には接尾辞の枠には収まらない副助詞の用法を生じたと考えられる。そして、室町時代後半には書きことばではともかく、話しことばでは人に付いて輕卑化する傾向が目立っていた。さらに時代が下つて、『江戸語大辞典』には、人の他に、時間・空間の意味分野に限定された用法が示されている。

①人の複数を表わす。たち。ども。(略)

②事物をおよそに指している。など。なぞ。なんか。あたり。

(イ) 時を指す。「けさら」「今日ら」「今夜ら」「昨夜ら」「ことしら」など。

(ロ) 所を指す。「おばさんの所らア(略)」「彼処らへも(略)」

「方・側」の意の「東ら」「西ら」は現在、徳島・香川・滋賀県にも存在する。高知県下では方位の他、ウチラ・ウチューラが「内部・内側」を意味するとともに、ラに「側」を下接する言い方、ウチラガワ(青女教示)ウチラッカワ(青男教示)も行われていて、ラの「側」の意味が希薄

化していることを窺わせる。なお、「外側」についてはこの言い方が全く認められない⁹。接尾辞「ら」は人に限らず、時・所に関しては現代方言にまだ余命を保っているであろう。

7. ラの機能拡大と機能分化

「ら」の通時的变化を概観したが、和文と漢文訓読文、書きことばと話しことば、などの文体的特性が「ら」の使用状況を複雑にしている要因と考えられる。現代共通語における用法はこうした歴史的背景が投影したものといえよう。毛利(1977)によれば、奈良時代の複数を表す「ら」と臚化法的表現の「ら」は、平安時代には漢文訓読の影響下に「等」の訓読語として、中期には「など」と同じ例示の意味機能を持つようになった。一方、臚化法的表現機能の「ら」は和文に痕跡を残しながら、代名詞接続の形式で後世に引き継がれ、同時に、漢文訓読の流れを汲む例示の「ら」の意味も兼ねることになり、現代語においては固い文体のニュース・新聞報道に用いられ、話しことばでは「たち」よりも品位の劣る複数辞や代名詞に付く軽卑辞として機能している。

上接語は大幅に縮小されており、鎌倉時代初期まではさまざまな名詞への接続例が確認できるものの、時代が下るにつれて、人に関わる複数を指示する機能¹⁰に固定化し、日本語に限らず、諸言語に普遍性をもつ軽卑化¹¹を支える意味機能を派生した。しかもこの間、漢文訓読語として、小林(1955)によれば、助詞「と」に下接する副助詞「ら」が生まれた。

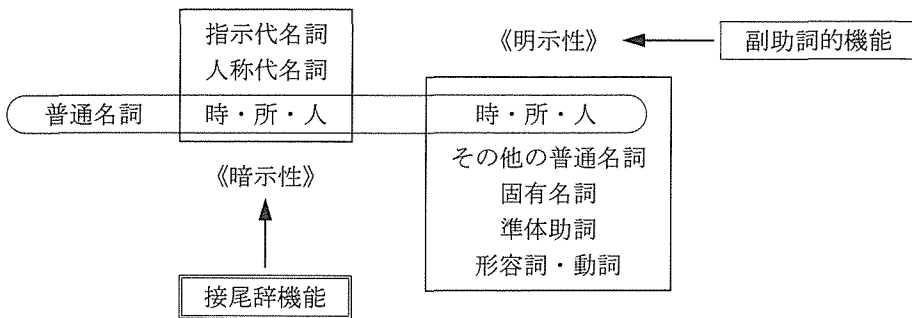


図1 接尾辞機能と副助詞的機能との相互関係

現代日本語から現代日本語方言へ視野を拡大すると、果して「ら」の様相は通時性を孕んで単純ではない。ここでは接尾辞か副助詞か、の判別が容易ではなくなっているからである。用例に照らして、高知県から紀伊半島南部に広がるラ(一)、そして北陸へ飛んで石川県白峰村のラには共通性が認められる。ラ(一)に一定方向の意味機能を見出しにくく、臚化法的表現機能(例：イマ^ラ 高知・石川 ムカシ^ラ 高知・石川 アシタ^ラ 石川 キョー^ラ 高知 キノー^ラ 高知)と例示機能とがその境界を侵しながら、まだ共存していると見られる。例示機能は共通語の副助詞「など」「なんか」相当であるため、接尾辞から副助詞へ移行しているようにも見られるが、和歌山の「キョービワラ」(注2参照)を例外として、助詞に下接する用例はなく、そのおおまかな様相は、接尾辞から次第に副助詞的機能を拡大しながらも、副助詞に移行したのではなく、接尾辞のまま機能を細分化することによって、接尾辞機能と副助詞的機能とを併せ持つようになったと判断さ

れる。少なくとも高知県方言では図1のように類型化できよう。

指示代名詞・人称代名詞に接尾辞として接続する用法は現代日本語および諸方言に広く認められる用法である。高知県方言も例外ではない。しかし、時・所・人を表す普通名詞では接尾辞から副助詞的機能に拡大している。ムカシラ・イマラ・ヒガシラなどは体言との一体感が強く、イマラの場合、イマリヤ(一)などの音変化形もあり、派生的な接尾辞機能、つまり膿化法的表現法と考えられる。これらには「など」「なんか」に当たる明確な意味機能は認め難く、ぼかし・非限定・おおよそ、といった、漠然とした《暗示性》がある。

そして、副助詞に近い機能と判断される、ユーベラーは「昨晩など」(例示)、トーキョーラーは「東京という大都会」(取り立て)、センセーラーは「特定の科の専門医」(取り立て)、ヒザラは「体の中のとくに膝」(取り立て)、シーツラーは「大きな洗濯物であるシーツ」(強調)を意味することから、例示・取り立て・強調、といった、瞭然とした《明示性》を担っている。しかし、形容詞・動詞への接続例を用言の連体形への接続と考えれば、すべてが文法的には体言に接続するため、接尾辞機能の拡大と捉えられ、接尾辞を脱しきってはいないことになる。

副助詞的機能については、すでに阪倉(1966)の次の指摘がある。

注意されることは、現代語のナドが、クラキ・ダケ・バカリなどととも、副助詞と呼ばれながら、前述のやうに、体言または用言の連体形に接続して、全体で体言相当の単位を形成し、むしろ準体助詞乃至は形式名詞のやうに機能して、接尾語にも通じる性格をしめした(同様なことは、副助詞全体についてみとめられる)のと同様に、ラにもまた、(病を等加へて/子を等妻を等おきて等も来ぬ/※該当箇所のみ引用、上野)のごとき副助詞的機能をもつ場合があつたといふことである。これまた、いはゆる接尾語なるものと助辞との関係を考へるうへに、一つの参考となるであらうと思はれる。

接尾辞と副助詞とは、このように品詞論上も相互に乗り入れるような関係にある。

文に接続する用法の場合、ラ(一)の位置が決め手になるが、格助詞「と」(実際にはテで実現)の前に位置する例が得られており、顕在しない例を含めて、漢文訓読で副助詞と認定できる「ら」のように、ラ(一)が「と」の後に来る可能性はきわめて低い。しかし、語調を整え、また物事を婉曲に示す接尾辞の機能が次第に拡大し、ラが長呼形ラーへと形態上も成長を図りながら、取り立て・強調の意味を添える副助詞的機能を累加しつつあると見られる。

《暗示性》《明示性》は互いに相反する機能でありながら、実のところ、時・所・人を表す普通名詞を接合点として互いに連続し、高知県方言に共存している。ラ(一)が時間・空間的な漠然とした範囲を示す場合や、人に関する複数ないし卑下の意味合いを暗示する場合は接尾辞の域にとどまるが、例示・取り立て・強調は前接語を明示する機能を備えている。

高知県方言ラ(一)について言えば、「など」「なんか」に付帯する軽視・謙遜の意味合いは複数の話者への確認を通して認められない。「傘なんか」を尋ねた『四万十川流域言語地図』の半数の地点54がワ、ラが11、ナンカ・ナンゾが7、分布するのは、共通語ナンカ・ナンゾがまだ十分に浸透せず、かといって、ラがこれに相当する言い方という意識は強くもないために、話者に係助詞ワを選ばせたものと推測される。丹羽哲也(2000)「主題の構造と諸形式」には、

「なんか」においては、(44) あの子なんか体育の時間はいつも大活躍だものね。という例は、「あの子なんか」が主題を表すと理解できるが、他方、(45) 庭園には、バラなんかがきれいに咲いてたよ。では、「バラなんかがきれいに咲いてたよ」の部分はひとまとまりの叙述であり、「なんか」のところに提示構造を見出すことはできない。つまり、(44)における主題の提示構造は文脈によるものであり、「なんか」そのものは提示構造を形成しないとして、「なんか」は、提示構造を「それ自体では持たないもの」に分類している。

あえて共通語に直せば「など」「なんか」「とか」に近いとは言え、現代高知県方言におけるラ(一)と等価の接尾辞あるいは副助詞を共通語に見出すことは困難である¹²。GAJの分布図には大掴みな傾向が現れているが、狭域か広域かの差がラ(一)の分布量を左右しているものと判断される。もとより、GAJの配符に現れた「やら」とラ(一)とは区別されるべきであろう。

8. ラ(一)の周辺

最後に、ラ(一)が副助詞「など」「なんか」に当たらないとすれば、高知県方言では、この種の言語形式にはいったい何が対応するのか、という問題が残る。共通語形ナンカはまれで、ラ(一)が引き受けやすくなるが、文献や質問調査を通して、別語の存在がつきとめられた。

土井八枝(1935)『土佐の方言』には「…かたけ 接尾 …など(等)。[註]もて余し又卑下する意味を含む。」として、「こんな古道具かたけ〜」「私はろくな事は何にも出来ません、雑巾かたけ刺して〜」「落ちぶれて賃仕事かたけして〜」の文例を載せている。また、宮地美彦(1937)『土佐方言集』には「何々などト云フ時ノなどニ當ル語デ(接尾語)、特ニ卑下シタ意味ニ用ヒル。」「塵芥かたけが〜」「ごろつきかたけは〜」、さらに土居重俊・浜田数義(1985)『高知県方言辞典』にも同様の記述が見られる。このカタケは46歳女性の教示により、「ヨーダイカタケ ユーナ。不平なんか言うな。」「コンナモノカタケラ イル カ。こんなものなんかいるものか。」という文例を得た。一方、岡林裕彦(1996)『本山の方言』には、

カタケ ~のような(くだらん、悪い、弱い、嫌いな等)もの。

「麦飯カタケ食えるか。お前等カタケと一緒にになるわけにいかん。」

とあり、カタケとラとの承接に相違が認められる。カタケラは、カタケにラが累加して副助詞的明示性を補完し、等カタケは、「お前」の接尾辞ラ(等)として機能している。カタケは老年層・中年層男性のことばに偏し、ぞんざいな会話場面にしか現れない(22歳女性)ともいう。若年層に限らず知らない人もいて今後は衰退の兆しが見える。竹村義一(1985)『土佐弁さんぽ』にも、

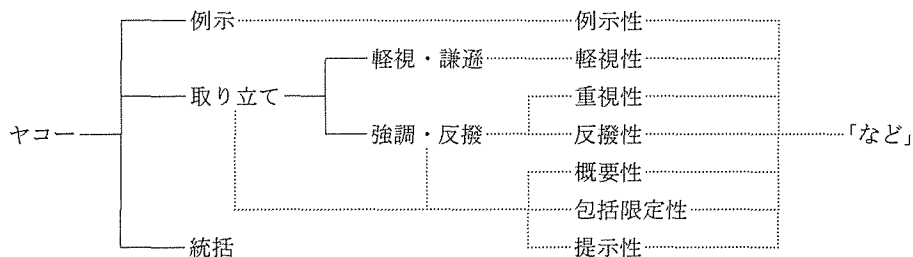
カタケは名詞に付いて「など」「なんか」の意を示す接尾語である。人でも物でも価値を低く見て、他に対しては見下げ軽蔑し、自分については謙譲・卑下する意を表す。品物については次のようにいう。(後略)

以下、詳しい説明がある¹³。ちなみに、土井八枝(1938)『仙台の方言』には「かだけ(片食)接尾適度の分量。「ひとかだけのごはん(一度分の御飯)」「お茶、もうふたかだけ頂くくらいしかござりいん(お茶がもう二度分しかありません)、中川三郎(1990)『坂出の方言』には「かたけに 全部。あるだけ。」などの記述が見える。確かに、カタケはGAJの「傘なんか(いらない)」の高知県に

のみ6地点あり，ラーの6地点と互角の分布量を示してはいるが，カタケが分担していた軽卑化の働きを次第にラ（一）へ譲りつつあるのではなからうか。しかし，現在のラ（一）は軽卑化をまだ十分に体现してはいない。かつて阿波方言のヤ・ヤカシ・ヤカイ・ヤコシ・ヤコイを考察した折，高知県のラ（一）に言及した¹⁴が，現段階では，ラ（一）とヤとの關聯性はきわめて低いと考える。ヤには格助詞「に」「で」に下接する例も認められる¹⁵が，ラ（一）にはない。したがって，阿波方言ヤに連続する岡山県方言ヤコ（一）とも一線が画されるのである。

注

- 1 次のように対比されている。この図には「など」の「代表性」と「婉曲性」とが示されていないが、「婉曲性」だけが「など」とヤコーとは交替できない、「代表性」については交替可能と判断されている。



- 2 f○キョービワラ モー サカナノ ソレ ナニスル トコマデ マタンノヤサカニ
 このごろなんかは もう 魚の そら なにする ところまで，待たないのだから，
 m○コノ ケンケンブネラデモ ムカシノヨニー トルユー コタ ネー
 この けんけん船なんかでも 昔のように 取るという ことは ない。
 f○ケロ ソレ アンタ クロシマノ トコラレ カツオラ ツツヤ ナイカー
 けれど それ あなた 九竜島の あたりで かつおなんか 釣ったでは ないかねえ。
 f○ワテララ コドモノ トキラデモラ アノ ソイ オーナイニニー クジラサ イナヒテ
 わたしたちも 子どもの ころにはね，あの ほら 大納屋にね くじらを 何して
- 3 m○コーチラ マイ マツリテ ナンニモ アンニヤ ナイシノ
 河内あたりには おまえ まつりといっても なんにも あるのでは ないしね。
 m○ヨイタプレテ タオレルホドノ サケラ ノム ヒター アラヘンワイ
 酔いつぶれて 倒れるほどの 酒なんか 飲む 人は ありはしないよ。
 m○マー タウエラ ボヤクシ マエー ター ウエント オクツー
 田植（をする人）たちは ぶつぶつ言うし，おまえ，田を 植えないで おくという
- 4 m○マ アシタラ コンデ マ ハダケヤラ タンボヤラエ マアツト
 まあ あしたあたり これで 畑やら 田んぼやらへ 回ると，
 f○マメラモ ホンノ ヒデオコトン ナツテ ツブレテワノ
 豆なども ほんとに ひどいことになつて 倒れてはね。
 m○アズキラデモ マメデモ イマワ ハナザカリヤシノ
 あずきなどでも 豆でも いまは 花盛りだしね。
 m○ムカシトア ソリヤ クーモンラワ ソリヤ モー テノウラ カエシタヨーナモンジャ
 昔と（比べると），それは食べる物などは，それは もう手のひらを返したようなものだ

f○サンジャ ムカシラワ シテ モー イリコヤラ イーヤラ ナニガ イワシ
 そのとおりです。昔は いろ粉やら イやら、 いわし。
 m○ギララガ オマエ ガッコエ デルヨーナ
 わたしたちが あなた 学校へ 行っているような
 m○イマラ ユーテモ ハナシワ デケヘン
 いまなど 言おうとしても 話は できない。
 f○ハナシラ デキンニャー
 話など できませんねえ。
 f○ナンジャ ヌカラ ヒトツモ トラント クーヤッタニャー
 なんだ、ぬかなどを ひとつも 取り除かないで 食べたんでしたねえ。
 m○イマイラト ムカシノ ソリャ クーモンラワ イマノ クーモンラワ
 いまと 昔の それは 食べる物などは、いまの 食べる物などは、
 m○シルラデモシテ イエラノ ミソラトワシテ ソラ ンマイ ミソヤツテ
 汁などでもね、自分たちの家などの みそなどとはね、それは おいしい みそで、
 f○クキラモ スベデ カラゲテ モテクチャッタヤー
 つけものなども わらしべで くくって 持って帰りましたよ。

- 5 高知大学人文学部学生の湯浅光太君が、平成11年度の日本語学演習で郷里方言の調査報告を行った際、提示した多くの文例の中にラーの用例が偶然に含まれていたもので、『全国方言資料』には見られないラの長呼例として貴重である。用例は発表資料からそのまま引用した。
- 6 主として奈良時代の例について論ぜられたものだが、この「ら」の本質は、平安時代に下つても、依然として同様に認められる。但しその使用される範囲が若干限定されたやうで、訓点資料では「等」の訓として殆く使用されたが、和文では「なにと」から転じた「など」の方が一般的になり、「ら」は僅かしか用ゐられなかつた。源氏物語では「おのら」「おのれら」「きんぢら」「これら」「ざふじら」「さんでうら」「それら」「なにがしら」「まろら」「われら」などの例が見えるが、男性の語などに比較的多いやうであり、人物について言ふことが多いらしい。和文の「ら」の例を求めると、右の他にも平中物語に「さけら」「おもとびとら」などがあるが、何れも比較的早い時期の和文であることが注意される。(築島1969)
- 7 この直訳語「ら」の成立の原因は、平安中期以後中国との交通が絶えた結果として、漢文に対する読解の実力の低下によつて、平安初期の個性的な訓法が亡び、形式的に漢字の同一字には能う限り一訓を固定させ、統一しようとする傾向に起因すると見られる。その結果として、本来あつた接尾辞の「ラ」の訓を「ゴトシ」の用法の同字「等」字にまでおし及ぼしたものであると推測する。この故に直訳語の「ラ」の意味が例示を示すヨウダに当るのも、実は本来「ゴトシ」の意の用法の「等」を読み変えた結果であつたからであることになる。(小林1955)
- 8 このような例の存在を勘案すると、自然な日本語としての複数表示は、少なくとも「ら」では統一しきれないと思われるのである。しかし、だからと言って、この問題を解決することは難しい。「ら」を「たち」に言い換えても、今度は軽蔑・蔑視に値する対象を「たち」ととらえることに異論が出るだろう。「ら」と「たち」とを使い分けるにしても、その明確な基準ができないだろう。このように、解決したくても妙案が浮かばない。そうした意味でも、複数を示す「ら」は気になることばなのである。(佐竹1999)
- 9 土居重俊・浜田数義『高知県方言辞典』には、「うちら」は「幡多では『うちひら』ということが多い。」という注記と、「うちゅーら 内部。内側。」に「外はひやいき、はよーウチューラへはいっちょり」の文例がある。土井八枝『土佐の方言』には、「うちら」は「内部、内面」として「外はまだ明がうちらははや暗い。」の文例が付してある。さらに、宮地美彦『土佐方言集』は、「う

- ちら」は「うちら（内裏）内部，内面。」の省略形と解釈している。
- 10 人称代名詞+ラは，単数が複数かが曖昧なので，「準複数」という術語を用いてはどうか，という提言（山口幸洋氏）をいただいた。
- 11 いずれの言語でも，さされる対象が単数，つまり，ひとりでも複数形を使うのがふつうです。単数形を用いると，フランス語の場合，きわめて親しいことを表わしますので，簡単には使えません。ドイツ語もほぼ同じです。トルコ語では，sen は“乱暴な”感じの，「お前，貴様」と訳されるような意味を伴います。トルコ語ではこれに複数接辞をつけることもできます。siz-ler ですが，これはいよいよ婉曲性が強くなります。（中略）なお，“複数形”が「2つ以上の数」を示すのではなく，「ばらばらにいくつかあること」を示すので，複数形が婉曲表現に用いられると説明できます。このことは，日本語とトルコ語の場合には自信を持っていえませんが，ドイツ語，フランス語その他については何とも言えません。（柴田武氏 1999.10.31付 私信）
- 12 これは畢竟，共通語の「ら」の用法が限定されているためであり，このラ（一）は方言を共通語に置き換えて解釈することの限界を示している。話者の言語表現の贅を表出するためのこうした方言の文法は，共通語に置き換えられるとあえなく消されてしまう宿命を持っている。共通語文例を方言に置き換える方法の質問調査では，調査者の求める贅のない表現が往々にして，典型的・類型的として事足れり，の状況を招来する。また，話者の内省を強いるような調査者本位の尋ね方にもなりかねない。時間をかけ，自然会話に耳を傾ければ，語彙よりも頻度は高く，用例は得やすくなる。この段階を経て，質問調査は内省を十分に促すことのできる環境で行えばよい。話者の側に降り立つ調査法，安易な共通語訳に頼らない方言調査の方法の確立が急務であろう。
- 13 カタケは土佐人の愛用語の一つである。この土佐弁のカタケの語源に擬せられる語に，近世の文献に表れる「かたけ（片食）」がある。当時は朝夕二食であって，そのいずれか一つを片食（かたけ）と言った。（中略）
- 一回の食事は軽少な物であるという意識から「かたけ」を軽少な意の語に使うようになり，土佐方言では，軽少な意を付加する意味を持つようになったのではあるまいか。（中略）
- 中四国の所々で「入れ物カタケ（ごと）上げる」「砂カタケ（混じり）の米」のような意に使う。「なんか」の意は土佐だけのようである。（竹村1985）
- 14 四国とその周辺に視点を定めると，これまで問題にしなかった「ラ（一）」の存在が浮かび上がってくる。高知県は「ラ（一）」で占められ，その続きと見られる和歌山県の「ラ」が少数ながらも示唆的である。つまり，「ヤ」は「ラ」から変化した可能性がある。
- （中略）方言として用いる地域は，石川県・三重県など北陸・近畿地方にも存するようである。また，意味が拡大して「側」を指示する用法が和歌山県・香川県にあるらしい。徳島県下にも「ニシラ」（西側・西方）「ヒガシラ（東側・東方）」からの音変形成と考えられる「ニツシャ」「ヒガツシャ」の言い方が盛んである。（上野1984）
- 15 田中敏生（2000）「徳島方言の副助詞「ヤ」一出現形態をめぐる内省的記述の試み一」では，助詞「ヤ」の研究としては，すでに文献①（→上野1984）があり，様々な角度からこの語を論じているが，出現形態めぐっては，なお精細化の余地も残されているのではないかと，[甲]格成分に関わるもの I 先行用法 II 後行用法 III 単独用法 [乙]その他のもの IV 広義連用成分に関わるもの V 述語成分に関わるもの，に細分化されている。

参考文献

- 植田 瑞子（1991）現代語における副助詞ナドの分布と特性『日本語学』10巻5号，77-93，明治書院
- 上野 智子（1984）阿波方言「ウチャ ミニヤ イタ コト ナイ」の「ヤ」について『方言研究年報』第27巻，189-206，和泉書院

- (1993) 高知市および周辺域方言の準体助詞「ガ」『国語と教育』第17号, 9-16
- (1996) 『四万十川流域言語地図』高知大学人文学部国語学国文学教室
- 岡林 裕彦 (1996) 『本山の方言』
- 加波 尚子 (1995) 副助詞「など」について—とくに「否定的強調」「軽視・謙遜」の意味を帯びる場合について『国文論叢』第23号, 1-17
- 高山寺典籍文書綜合調査団 (1978) 『明恵上人資料第二』東京大学出版会
- 国立国語研究所 (1989) 『方言文法全国地図』第1集, 大蔵省印刷局
- 小林 芳規 (1955) 訓点語法史における副助詞「ら」『国語と国文学』32巻11号, 47-56, 至文堂
- 阪倉 篤義 (1966) 『語構成の研究』角川書店
- 佐竹 秀雄 (1999) 複数を示す「ら」『日本語学』18巻14号, 19-22, 明治書院
- 竹村 義一 (1985) 『土佐弁さんぽ』高知新聞社
- 田中 敏生 (2000) 徳島方言の副助詞「ヤ」—出現形態をめぐる内省的記述の試み—『凌霄』第7号, 18-29
- 築島 裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- (1965~1967) 『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』東京大学出版会
- (1969) 『平安時代語新論』東京大学出版会
- 土居 重俊・浜田 教義 (1985) 『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団
- 土井 忠生 (1955) 訳 ロドリゲス『日本大文典』(原著 1604 長崎学林刊) 三省堂
- 土井 八枝 (1935) 『土佐の方言』春陽堂
- (1938) 『仙台の方言』春陽堂
- 友定 賢治 (1992) 岡山県方言の研究(2) 副助詞「ヤコー」とその周辺『国語表現研究』第5号, 13-24
- 中川 三郎 (1990) 『坂出の方言』
- 中野 朝生 (1989) 『面白紀州弁』
- 日本放送協会 (1966~67) 『全国方言資料』第3巻「東海・北陸編」第4巻「近畿編」
- 丹羽 哲也 (2000) 主題の構造と諸形式『日本語学』19巻5号, 100-109, 明治書院
- 前田 勇 (1974) 『江戸語大辞典』講談社
- 宮地 美彦 (1937) 『土佐方言集』富山房
- 毛利 正守 (1972) 例示「ラ」の成立をめぐる(国語学会研究発表会発表要旨)『国語学』第90集
- (1977) 「憶良ら」考—上代の接尾語「ら」を通して—『万葉集研究』第6集, 227-261
- 森 貞 (1999) 「など」の否定極性用法について『国語学会平成11年度春季大会要旨集』, 68-75
- 山口 堯二 (1988) 副助詞「など」とその周辺『語文』第50輯, 22-31

付記

本稿の主旨については、日本方言研究会第69回研究発表会(愛知県立大学 1999.10.29)で口頭発表を行った。数々の意見と教示をいただき、その後も貴重な助言をいただいた。なお、訓点資料については山本秀人氏(日本語史)から教示を受けた。多くの方々から賜った学恩に深く感謝申し上げる。

(投稿受理日: 2000年8月25日)

上野 智子(うえの さとこ)

高知大学人文学部

780-8520 高知市曙町2-5-1

The implicit expression and explicit expression of *ra* and *ra-a* in the dialect of Kochi prefecture

UENO Satoko
Kochi University

Keywords

suffix, *ra* and *ra-a*, auxiliary particle, implicit expression, explicit expression

Abstract

In modern Japanese, the suffix *ra* functions as an indicator of the plural and it is generally used in conjunction with personal nouns and pronouns. In olden Japanese, however, *ra* was used not only with personal nouns and pronouns but also with various nouns. In particular, *ra* is a commonly used suffix in the *Kanbun Kundoku-go*, an olden Japanese translation of Chinese literature, in which it functioned as both a suffix and an auxiliary particle.

In Kochi dialect, *ra* and *ra-a* are frequently used in conjunction with the various nouns regardless of the user's age and gender. In this study, the usage of *ra* and *ra-a* in Kochi dialect was analyzed and their semantic characteristics were found to be the following.

1. *Ra* and *ra-a* function as both suffix and auxiliary particles. When they function as a suffix, the nouns become more implicit in terms of expression.
2. When *ra* and *ra-a* function as auxiliary particles, the nouns become more explicit in terms of expression.

A similar usage of *ra* and *ra-a* is found in dialects in Wakayama, Mie and Ishikawa prefectures which surround Kyoto, the old capital and the center of the old culture. The characteristic distribution of the usage of *ra* and *ra-a* in Kochi, Wakayama, Mie and Ishikawa dialects indicates that they are derived from olden Japanese and that the olden usage of *ra* still remains in these dialects.